

【論文】

カリブ海とロビンソン・クルーソー物語（2）

磯山 甚一

The Caribbean Sea and the Robinson Crusoe Story (2)

Jinichi ISOYAMA

今回はロビンソン・クルーソー物語が今日のわが国で「絶海の孤島」物語として読まれていることを明らかにした。しかし実際にはロビンソン・クルーソーの島は大陸沿岸のカリブ海に位置しており、その島における物語は18世紀カリブ海言説と考えるべきである。今回は、そのカリブ海言説としての物語が近代世界のなかでどのように読まれ、わが国では「絶海の孤島」物語となってきたかを検証する。そのためにまず、題名にある‘adventure’という語が日本語で「冒険」と訳された事実注目する。その事実によどのような暗示があるか、‘adventure’と「冒険」のそれぞれが持つ意味を確認する。そして両者の意味を比べると、訳語の「冒険」は‘adventure’のそなえる意味の一部を伝えるにすぎないこと、ロビンソン・クルーソー物語について、それを「冒険」物語として、あるいは‘adventure’物語として読むかぎり、彼の島における生活について語ることはできないことを明らかにする。

キーワード：冒険, カリブ海, ロビンソン・クルーソー, デフォー,
絶海の孤島

Ⅲ 近代主義的読解（＝文脈剥脱の過程）

今回はⅠとⅡで *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*（ヨークの水夫ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険）の中心的部分——島の生活——に焦点を当てた。われわれ今日の読者はたいがい、その島がどこか位置も明確にわからない

大海のただなかに、孤立して浮かぶ島だと思い込んでいる。結果としてその物語は、そのような孤島で繰り上げられるものとして、いわゆる「絶海の孤島」の物語として、われわれ現代の読者のあいだに定着していることを明らかにした。

それがロビンソン・クルーソー物語を読むわれわれの実情である。その実情を踏まえたうえで、次のことを明らかにした。すなわち、ロビンソン・クルーソーの島は南アメリカ大陸の海岸線から至近距離に位置しており、実在するトニニダード島に近いカリブ海上に浮かぶ島、オリノコ川河口の島という設定になっている。そのことは原著の表題にも、さらには物語の中でもはっきりと述べられており、ロビンソン・クルーソーの孤島における物語は、実際のところ「18世紀カリブ海言説」として存在する。

そのようにして、ロビンソン・クルーソーの孤島における物語を、カリブ海をめぐる様々なテキスト群のなかに位置付けることが前章までの課題であった。そしてその物語は、18世紀カリブ海言説として位置付けることで、「絶海の孤島」の物語として読む場合とは違う側面に注目できる。のみならずその物語は、今日に流通するその他のさまざまなカリブ海言説やカリブ海表象のなかに配置して読むとき、それらと連続性があると同時に、独自性もあることを明らかにした。

ロビンソン・クルーソー物語の原著の表題は *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner* である。そのうち孤島における生活の物語がとりわけよく知られるようになり、それが実際はカリブ海言説であるにもかかわらず、どのようにして「絶海の孤島」物語として定着することになったのか。本章では、それを「近代主義的読解」の成立過程と名付けて検討することを課題とし、表題にある‘adventure’という語を手がかりにしてアプローチしていくことにしよう。^(注1)

原著の表題は *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner* であるが、邦訳として刊行される際には、「ヨークの水夫ロビンソン・クルーソーの生涯と不思議で驚くべき冒険」として日本語で表

現した題名はないようである。訳書は、たとえば『ロビンソン・クルーソー』、『ロビンソン・クルーソー——生涯と冒険——』、『ロビンソン漂流記』などとなっている。原著の表題に対し翻訳に際して加えられたこのような変更は、一見すると些細な変更に過ぎないように見えるかもしれない。しかしその変更は、わが国におけるロビンソン・クルーソー物語の近代主義的読解と深く関わっている。

① ロビンソン・クルーソーの ‘adventure’ と「冒険」

その課題に取り組むアプローチのひとつとして、まず、題名にある ‘adventure’ が日本語で「冒険」と訳されていることに焦点を当ててみよう。日本語の「冒険」は、英語の ‘adventure’ やフランス語の ‘aventure’ の訳語として用いられる。ロビンソン・クルーソー物語について日本で広く流通している読み方では、主人公の孤島における生活がその「冒険」であると考えられている。だが、結論を先取りして言うならば、その受けとめ方は物語の実際に即していない、というのが私の主張であり、これから検証してみよう。

ロビンソン・クルーソー物語、すなわち *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner* には、主人公の島での生活だけでなく、彼が生れ故郷のイングランドを離れてからその島にたどりつくまでの経緯も描かれており、さらには、その島を離れてから再びイングランドに帰るまでの経緯もきちんと描かれている。それらの経緯を前後に置いて、島での生活の部分が中心部に配置され、全体として ‘adventure’ すなわち「冒険」としての題名が与えられている。それがこの書物全体の表題の表す意味である。

ところが、前章にも取り上げたように、この物語のわが国における紹介文は次のようなものが主流である。

「絶海の無人島に孤独の境にある男」（佐治秀壽『英國小説史』1927年発行）

「絶海の孤島に漂着し、難破船からいろんなものを運びあげて毎日毎日生活のために苦闘し、一人の蛮人を助けてこれを従僕としてくらし、やがて故郷に帰っていった人間」「ロビンソンがただ独り、営々として生活をきりひらき、ものを作り、喜び、悲しみ、祈り、呪って日々を送ってゆく姿の中に……」（『ロビンソン・クルーソー』(上) はしがき——ロビンソン・クルーソーという人間——）

「さまざまな困難に立ちむかい、知恵を働かせて生きた28年間のひとりきりの大冒険」「絶海の孤島での冒険」（『ロビンソン漂流記』のカヴァーの宣伝用紹介文、および巻末の解説）

「典型的な当時の中流人が無人島に漂着して、神に信頼しつつ生活条件を改めて行く過程を描いたものである」（『英米文学辞典』）

これらに代表されるように、島における生活の部分に注目する読み方が通例となっている。上に引用した紹介文のうち、とくに三番目の文章で言われている「28年間」とは、まさに島における生活の期間のことであるから、この紹介はロビンソン・クルーソーの「冒険」がその島の生活を指していると言っているとしか読めない。この紹介文はまさに、われわれが（少なくともこれまでの私が）ロビンソン・クルーソー物語について抱く印象を代表するものである。

ところが、物語テキストをよく読むことによって判明する意外な事実があることを私は指摘したいのである。すなわち28年間の島での生活について、‘adventure’ という語はテキストの中で用いられないこと、物語の語り手であるロビンソン・クルーソー自身は、‘adventure’ という語を用いて島における自分の生活に言及することは一回もないことである。これは、その島での生活が、上で紹介したように、一般に ‘adventure’ すなわち「冒

険」と考えられていることに反している。

われわれ（少なくとも私）は、自分自身の読書経験としてロビンソン・クルーソー物語のテキストを実地に確認することを怠ったのではないか。誰か別の人が「英文学史」のなかに位置付けてそのテキストを「文学作品」として読んでくれたとおりに、その物語を読んでいたことになるだろう（「一般の読者がテキストに出会うことはほとんどないと考えてよい」（富山：51）という事情にあてはまる典型的な例であろう）。前章で見たとおり、その島がカリブ海に位置する島であるにもかかわらず、大海のただ中に浮かぶ「絶海の孤島」と思い込んだのも、それに類する読み方の一例であろう。

この物語における島の生活の位置付けが、一般的に言われる「冒険」と相反するものであることをこれから確認してみよう。そのための方法としては、テキスト中で‘adventure’という語が使用される箇所を具体的に一つひとつとりあげ、それらが個々の文脈においてどのような意味で用いられているか、それぞれ意味を確認することにしよう。それによって、ロビンソン・クルーソーの「冒険」とは何かという課題に対し、なにかしらの回答が得られることになるとと思われる（‘adventure’がテキスト中にどの場所で用いられているかは、今日の電子情報機器がこのうえなく便利。電子化されたテキストを入手し、「検索」機能を活用すれば立ち所に判明する）。

② ‘adventure’ と「冒険」

最初に、‘adventure’ および「冒険」という語そのものについて。英語の‘adventure’に関しては、『オックスフォード英語辞典（*Oxford English Dictionary*）』および『研究社新英和大辞典』を参照する。

これらの辞典で語源の項を参照すると、‘adventure’はラテン語からフランス語経由で英語に取り入れられ、13世紀頃から英語の語彙に入っていた。フランス語の語形では‘aventure’であったが、英語に入ると‘adventure’となる、すなわち、綴りのなかに‘d’が付け加わることになった。関連す

る英語の語彙としては、‘adventurer’ ‘advent’ ‘adventitious’ そして ‘venture’ などがある。

日本語の「冒険」については、『日本国語大辞典』が参照できる。語義の欄には、「危険をおかして行なうこと。成否の確実でない事をあえて行なうこと。また、そのさま」とある。さらに「語誌」の欄が付されており、その記述は次のとおりである。

(1) 森鷗外の「藤鞆絵」(一九一一)に「冒険という詞は、aventure (アワンチュウル)を故人森田思軒が訳して、始て使ったのだと、本人の直話であった」と記されているが、必ずしも事実ではない。(2) 元来、漢籍では、「(危)険を冒す」の意で、「附御挿図英和字彙」(一八七三)には「Venture 冒険(ムヤミ)」「Adventure 冒険者(ムヤミナヒト)」などに見える。(3) 明治二〇年代の翻訳探偵小説で、頻繁に用いられるようになり、さらに明治末期・大正初期の冒険小説のブームが、この語を一般に定着させた。

すなわち、「冒険」という語そのものは「漢籍」にも現れる語彙であるが、鷗外の言がある意味で事実を述べているとすれば、それはフランス語 ‘aventure’ の訳語として明治以後に日本で広く用いられるようになった、ということである。^(注2)

しかし次に見るように、翻訳語としての「冒険」は、もともなった語である ‘aventure’ すなわち ‘adventure’ が、ラテン語を起源としてフランス語、英語というヨーロッパの言語で共通の語彙となり、その過程でそなえることになった幅の広さを日本語に移していない。日本語の「冒険」には、漢籍の伝統に由来する意味が付きまとうことも理由のひとつであろう。それはもちろん、異言語間の翻訳にはいつでもつきまとうであろう、避けられない事情であるが。

そこで『オックスフォード英語辞典』の区分をそのまま借用し、

‘adventure’の意味を、あえて日本語に直してみたうえで、区別しておくことにしよう。

1. 不意に起こる事、偶然、運
2. 偶然の出来事、不慮の出来事
3. 運だめし、試行
4. 危険
5. 危険な企てや試み
6. 新奇な、または予想外の出来事
7. 金銭的な危険、投機、商業的企画
8. 危険との遭遇、新奇な出来事への参入

これらに関連する意味にまとめて考えると、大きく四つに区分できる。ひとつは、1と2の意味にあたり、「不意に起こる事、偶然、運」に関する意味である。‘adventure’の語源をたどると、もともとそういうことであった。これらの意味は‘obsolete’すなわち「すたれた[意味]」と記載されており、今日この意味で用いられることはまれであるが、全くないわけではない。たとえば、まれに見かけることがある‘peradventure’（偶然に）という語がそれにあたる。後で確認するとおり、ロビンソン・クルーソー物語でもこの意味で用いられる場合が何回かある。

二つ目は3,4,5の意味にあたる。これらの意味には、国語辞典で定義されている「危険をおかして行なうこと。成否の確実でない事をあえて行なうこと。また、そのさま」が含まれる。結果として、‘adventure’には危険が偶然的に付随するかもしれないが、ただし、危険は必然的に伴うわけではない。日本語で「冒険」と訳されるときの意味は、そのような意味で用いられる場合の‘adventure’である。その他に‘adventure’がそなえる意味は、日本語の「冒険」ではカバーできないと言っていいだろう。

三つ目としては、6,8のような、新奇な出来事に関連する意味である。

これらの意味も、ある人の身に偶発的に起こる事が、その人にとって目新しいということである。必ずしも危険なわけではない。

もうひとつ、第四の意味としては、お金が資本として投下されることに関係して、「投機、思惑」と言われる行為を指すことがある。今日でも‘adventure capitalism’や‘venture capital’という語があるとおりで、それらに含まれる‘adventure’はこの意味にあたる。その資本が利益を生み出すかどうか、成否は確実でない。だから‘adventure’なのである。オックスフォード英語辞典に掲載される用例によれば、‘adventure’がその意味で新たに用いられるようになるのは17世紀になってからである。つまり、その意味で用いられるようになったのは、ロビンソン・クルーソーが生まれ育った世紀とちょうど重なっていることになる。

以上のとおり、‘adventure’は、日本語の「冒険」だけでは表せない、もっと幅のある意味をそなえていることが確認できただろう。これらの意味に共通する要素を言い表してみると、どう言ったらいいだろうか。すなわち、何かしらの出来事が、人間的な意図とほとんど関係なくその人の周辺に起こる、ということであろう。その出来事に関わる人にとって、その語を用いて表現された出来事は、偶然的または偶発的に見えるのであって、通常の人間的意図を超えている。結果として、その出来事にはその人にとって「危険」が付随することがあるかもしれないが、危険は必然的に伴うという暗示はない。そういう点で、‘adventure’と日本語の「冒険」の意味はきっちりと重なるとは言えない。

③ ロビンソン・クルーソーの‘adventure’と「冒険」

The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner のテキストにおける文脈に即して、‘adventure’および翻訳語の「冒険」の使われ方とその意味を個々に検討してみよう。

まず、題名が最初の用例である。それはそのとおりであるが、この物語全体が過去に終わった出来事の回想という、今日の小説でも最も一般的と

なっている叙述形式を採用していることを考慮に入れるならば、もうすでに何回も述べたとおり、この題名は島の生活だけをとりあげて‘adventure’として回想しているわけではない。続編として発表されたロビンソン・クルーソー物語は‘further adventures’と名付けられているが、こちらには島でのひとりきりの生活にあたるような部分はないにもかかわらず、その物語全体はやはり‘adventures’である。

続いて「序文 (Preface)」に記された「編者 (editor)」の言葉として、物語全体について言われた言葉がある。すなわち、‘the story of any private man's adventures’に属するもので、公にして刊行する価値のあるものがあるとするれば、これこそそうだというわけである。ここで言われる‘adventure’は、題名で用いられる‘adventure’と同じ意味で使用された例であろう。

この‘Preface’を誰が書いたのか、The Penguin English Library に収められた英語版テキストでも、だからもちろん邦訳版でも、その名前は明記されない。この「序文」は、このテキストの発行をめぐる虚構をささえる仕組みのひとつである。つまり、実際はデフォーというジャーナリストが、ロビンソン・クルーソーというペンネームを用いて虚構の物語を書いた。その事実は、何らかの理由によって、テキスト上から隠蔽しようという決定がされたのである。そういうわけで、あたかもロビンソン・クルーソーという人物が実在するかのように、そしてその人物が実際に経験したことを伝える物語であるかのように、そのテキスト全体が細部に渡って振舞わなければならない。表題には筆者であるロビンソン・クルーソーが自分で書いたとわざわざ断り書きを入れたほか、筆者とは別にその物語の出版に加わった人物がいたことにして、その人物は「編者」としてこの「序文」を書いたことにする、そういう虚構がさらにひとつ加わったというわけである。

本文に目を移してみよう。本文中で最初に‘adventure’が用いられるのは、「老人になっていた」父親が、ロビンソン・クルーソーを「痛風でとじこもったきりの自分の部屋」に呼んで、親としての思いを語って息子を諭

す場面である。邦訳によれば父親はこう言うのである、「冒険を求めて（原文は ‘upon adventures’）海外に乗り出し、思い切ったことでひと旗あげ、尋常一様でない仕事をやって名をあげようなんて連中は、やぶれかぶれになった人間か、幸運に恵まれた野心家か、そのどちらかなのだ」（佐山訳）と。

「冒険を求めて」すなわち原文で ‘upon adventures’ の部分は、もうひとつの平井訳では「運を賭して」と訳されており、この文脈の意味としては、こちらの「運を賭して」の方がふさわしいだろう。というのは、父親が言っているのは、そういう人たちが「海外に乗り出す」ことの目的は、「ひと旗あげ……名をあげよう」とすることであって、その行動の結果がどうなるかは、「運 ‘adventures’」に依存していると言いたいのである。海外に乗り出す行動の目的について言及して「冒険を求める」ことだと言っているわけではない。「冒険を求めて」という訳文にすると、「冒険」それ自体が、海外に乗り出す人たちの行動の目的と化しているかのような印象を与える。しかし、父親は日本語でいう「冒険」をすること自体がそれらの人たちの行動の目的だとは言っていない。その人たちの目的ということになれば、「ひと旗あげ」ること、「名をあげ」ることだと理解すべきであろう。

ここで ‘abroad’ が「海外に」と訳されていることに注目しよう。イングランドという地名は海に囲まれた島（ブリテン島）の南側一帯を指すのであるから、「海外」に行くとはその島から外に出ることを意味する。それと同じ意味で、平井訳のように「外国に」という訳もありうる（イングランドからスコットランドに行くのであれば、「外国」に行くのではあるが、「海外」ではないわけだ）。日本語では、「海外」と「外国」の意味が一致していることは国語辞典の定義やわれわれの語感からも明らかである。わが国において、第二次世界大戦後の国民国家建設で、日本列島の地理的な範囲がほぼそのまま日本という国民国家の範囲と一致していた歴史的経緯を反映している。

後にロビンソン・クルーソーがそのとおりに船に乗り組んで海に出ることは確かである。しかし、ここで父親が‘abroad’と言うのは、自分の従来の生活空間を離れて他の土地に行くという意味の‘abroad’であって、父親が直前で述べているとおり、「親の家を出、生れ故郷（my native country）を捨てる」ということであると考えerべきであろう。「生れ故郷」は、ロビンソン・クルーソーの生まれたヨーク市か、その一帯の地方のことか、あるいは、イングランド全体のことなのだろうか。もしもその「生れ故郷」がイングランドを指すとすれば、‘abroad’は「海外に」や「外国に」が当てはまることになる。だが、「生れ故郷」が何を指示するか曖昧であるかぎり、‘abroad’が何を指示するかも確定できない。「親の家を出」と並んで言われているところから判断すれば、「生れ故郷」はイングランド全体におよぼほど広い地域を意味するとは考えにくい。

ところが、英語における‘abroad’が邦訳において「海外」となり、「外国」と訳されてしまうのは、日本の近代における「国家」の存在の大きさを物語るものであろう。まさに「この国民国家化が、いわゆる近代化（modernization）の本質である」（岡田29）と言われるとおりである^{（注3）}。そのうえ、「外国」や「海外」という言葉は、今日われわれが普通に考えるような近代的な国民国家（ネーションステート）としての国がロビンソン・クルーソーの時代にすでに存在していたかのような連想も伴う。国家と国家の境界線が国境としてきっちりと区画され、国家の「主権」が及ぶ領土があり、国家の存立にかかわる死守すべき境界線があり、その領土に付随する国民がいたかのように考える可能性もある。だが、そのような形の国民国家は、18世紀にはこの地球上にまだ確立していなかった。

もちろん、ロビンソン・クルーソーが生まれたヨークが含まれるイングランドや、あるいは隣のスコットランドは、王国‘kingdom’であるという意味において国であったことは確かである。だが、16世紀から18世紀の二、三百年は、ヨーロッパにおいて最初に国民国家が形成されつつあったと言われる時期にあたり、まだわれわれの知っている意味での「国民国家」

が完成していなかったのはもちろん、そのシステムをもとにしたインターナショナル、またはインターステートの諸ルールは確立していなかった。「外国」に行くためには、今ならパスポートや出入国にまつわる煩瑣な手続きが必要なことは誰でも承知していることであろう。ロビンソン・クルーソーは、もちろん、そんな手続きなど何も言うてはいない。

次に‘adventure’という語が用いられるのは、ロビンソン・クルーソーが北イングランドのハンバー川河口に位置するハルの港からロンドンに向かう船に乗り込んだことを記述した部分である。その年と月日までもが丁寧に記載されており、1651年9月1日のことである（1651年は、イングランドで第1次「航海条例」が制定された年であり、海洋帝国としてのイングランドの躍進が開始される契機となった記念すべき条例であった。もちろん後から見てそう言えるということだが）。

そこでロビンソン・クルーソーが用いるのは‘adventure’という語そのままではなく、それから派生して人を表す‘adventurer’という語であり、ロンドンに向かう船に乗り込むという行動に出た自分を指して自分で言ったものである。本来の‘adventurer’とは、未来に向けて、成否はわからない、もしかしたら危険を伴うかもしれない企画に、危険を承知のうで関与する者、という意味であり、われわれが日本語で通常用いる意味の「冒険家」を意味すると考えていいだろう。彼の父親が彼を諭すために話題にした人々は、「ひと旗あげ……名をあげ」ようとして、「運を賭して（upon adventure）」故郷を去っていく人々であり、それらの人々もまた「冒険家」と言えるだろう。

ロビンソン・クルーソーの場合はどうだろうか。興味深いと思われるのは、「運」の意味の‘adventure’と、「冒険」の意味の‘adventure’が、ロビンソン・クルーソーの行動にも含まれているように見えることである。本来の意味の‘adventurer’であれば、その人に確かな目的があつてしかるべきだろう。ところがロビンソン・クルーソーはなんのために「親の家を出、生れ故郷を捨て」ようとしているのか、その行動の目的を自分で

も十分に認識していない。彼の場合、自分の未来に対する確固とした計画はないも同然であって、ただ自分でもよくわからない衝動に突き動かされているだけだと説明されている。

彼を突き動かすのは「世界を見る ‘seeing the world’」という衝動であって、世界を見てどうなるのか、その先に到達すべき何があるのかは述べられない。つまり、将来像は彼の視野の外にある。父親は「運を賭して」海外に乗り出す人々がいると言ったが、その人々の運を賭けた「冒険」と、ロビンソン・クルーソーの行動は違うと言わねばならない。何ら将来像も描けずにただ単に「運を賭して ‘upon adventure’」生れ故郷を捨てるのと、何か確固とした目的をもとに意図的な「冒険 ‘adventure’」に向かうことは、違はずなのだ。だが、ロビンソン・クルーソーにとっては、そのような自分の行動も ‘adventure’ だとして、自分を ‘adventurer’ だと言っている。彼の言う ‘adventurer’ は、「冒険家」というよりはむしろ、「運まかせの人」とでも言えるだろう。

また、ここで言われる「世界 ‘world’」はどういう意味で「世界」なのかも興味深い。「世界」という語が、地球全体を指すようになったのは、歴史的に見ればほんのつい最近のことである。そうなる以前には、たとえば「地中海世界」と言えば、「地中海」を中心とした沿岸地域のことであり、人々が自分たちの活動空間として意識できる範囲がすなわち「世界」である。大人の世界、子供の世界と言えるのもそのためである。英語の ‘world’ の場合でも、日本語の「世界」の場合でも、事情はほぼ同じであろう。ロビンソン・クルーソーが見たいと言っているもの、すなわち ‘world’ が、「世間」（佐山訳）と訳されるのも十分納得のいくことである。このように彼はここで全地球的規模の世界を見たいと言っているわけではない。だが、その ‘world’ はまさに全地球的な規模になりつつあったことも確かであり、ロビンソン・クルーソーはそのような拡大する世界に偶然的に（すなわち ‘peradventure’）巻き込まれるのである。

これを私は次のように考えてみたい。すなわち、従来の旧世界（旧大陸、

すなわちヨーロッパ世界)のなかにおける‘adventure’は、たとえ「運を賭した」行動であったとしても、事の成否、すなわち未来への見通しはある程度は推し量ることができる。つまり、自分の企画として見通しをたて、ある程度の制御ができる範囲にある。なぜならば、旧世界は既知の部分に属するから。

だが、ロビンソン・クルーソーが世界を見たいという衝動に突き動かされてきた17世紀は、すでに「最初のグローバリズム」の洗礼を受けていた時代である。もちろん、ロビンソン・クルーソーのようなヨーロッパの主体こそが、そのグローバル化を推進する側にいた。ロビンソン・クルーソーの‘adventure’には、ヨーロッパから見た新世界(のちにアメリカ大陸という名称を授かる)を含めた、拡大世界が待っていることが暗示されている。そのような新しい規模に拡大された世界では、未来にいったい何が待ち受け何が起こるのか、自分の行動をどのような見地から位置付ければいいのかも、いまだに本当のところはよくわからない。情報が少なく、手探りの状態である。ロビンソン・クルーソーの行動は、そのような最初の「グローバリズム」のなかにおける‘adventure’が視野に入っているために、彼自身にとっても、自分の行動を自分でも判然としない「衝動」としか名付けようがなかったのだ。

次に出てくる‘adventure’の用例では、ハルの港を出航したあと、嵐にあつてその船が漂流する様を描写して、‘at all adventures’と言われる。この語句が邦訳には「運まかせに」「運を天にまかせて」とされているように、‘adventure’が「運」の意味で用いられた典型的な用例にあたる。この箇所を日本語で「冒険」を用いて訳すことは、不可能ではないにしても、無理があることだろう。この例は、現在ではイディオムを構成する語として用いられるだけになってしまった‘adventure’の意味を明確に残している用例であり、最初にあった‘upon adventure’(運を賭して)の場合と同じ系列の意味に属する。

この直後に、興味深い‘adventure’の用例がつつぎと出てくる。まず、

ロビンソン・クルーソーが「アフリカ沿岸むけの船にのった。船乗りがぞくにギニア航路とよんでいる航路だった」という文脈で用いられる例である。彼がその船に乗ってアフリカに向けて出かけた行動そのものを指して、‘adventure’ と言われている。邦訳では、一方の訳文は「冒険」となっているが、もう一方は、その文脈から把握できる意味を生かしたのであろう、「貿易上の航海」と訳している。

アフリカは、そのうちの地中海沿岸について言えば、古代ローマ帝国の版図に含まれており、それ以来地中海の北側に位置するヨーロッパと交易の相手となっていた地域であり、ヨーロッパにもよく知られていた。だが、ロビンソン・クルーソーが船に乗って目的地としたのは、アフリカはアフリカでも、その大陸の西海岸をさらに南進した地域のことである。ポルトガルのエンリケ航海王子が15世紀の前半に先陣を切って西海岸を南進したのが合図になったことはよく知られている。やがて、バスコ・ダ・ガマが「希望峰」と名付けた岬までたどりつき、アフリカ回りのインド航路を開いたのは1498年である。1492年に最初の航海が行われたコロンブスの「新大陸」との往復にも遅れをとっている。その意味では、アフリカもまだ全貌は明らかになっていない、いわばもうひとつの「新世界」であり、「新大陸」であったとも言えるであろう。

そのような航海に出ることは、まだまだ船舶の安全性が十分に確保されたわけではなかった頃であるから、確かに危険をともしない行為であった。だから、その航海が日本語でいう「冒険」だというのはよくわかるし、アフリカ航海がこの文脈で「冒険」であったこともよくわかる。だが、‘adventure’ は、必ずしも海と関わらなくてもよかったし、ましてや「貿易上の航海」ではないだろう。それにも拘わらず「貿易上の航海」となっていること自体が、17世紀から18世紀におけるイングランドの特殊事情（海洋国家としての拡張主義）を、デフォーのテキストに実によく読み込んだ結果の翻訳と言えるであろう。ここで、最初に分類しておいた ‘adventure’ のうち、四つ目の意味が浮かび上がる。すなわち、「投機、思惑」という意

味の‘adventure’である。

そのことが次の用例でさらに明確になる。「少しばかりの商品を積みこんでこの船長と船出をした」と日本語で言われるときの「商品」が、英語の‘adventure’にあたる。ここで用いられる‘adventure’は、ロビンソン・クルーソーが「船長と船出」をする際に「積みこんで」いくものであるから、彼が持ち運ぶことの可能な、何か形のあるものでなければならない。「冒険」や「投機」のような抽象的なものを「積みこんで」行くとは言えない（暗喩としては可能だが）。そのように積み込んでいく可能性のあるものを表現する語彙としては、「商品」のほかに、「物資」とか、「資材」「品物」などが考えられるかもしれない。

その部分をもう少し読み進むと、それらは実際のところ「玩具や安物の雑貨類」であることが判明する。だから、邦訳に見られるように、「商品」という訳は確かに一面では適切であるが、もう少し考えてみなければならぬ。「商品」という言葉には、次に述べるように、一筋縄ではいかないところがあるからである。

英語で‘adventure’と呼ばれたそれら「玩具や安物の雑貨類」の物資は、ロビンソン・クルーソーがロンドンから船出をするときに船に積みこんでいっても、船が到着する土地（アフリカのどこか）で果たして「商品」になるかどうかはわからない。それはまさに交易の原則であって、その意味において‘adventure’の意味が生きてくる。買い手がいるかどうか、出発の時点では誰にも明確には判断できない。そもそもアフリカで、そのようなヨーロッパと相互交渉が可能な商品経済が成立しているかどうかさえ、決して自明のことではなかったはずである。帰趨は運にまかされている。だからこそ、‘adventure’としての商品と言うことに意味があることになる。

『オックスフォード英語辞典』や各種の英和辞典を含めて、辞書に掲載される意味としても、‘adventure’に「商品」という意味の項目は掲載がない。だから、「商品」として‘adventure’を用いるのは、この文脈だけで用いら

れた特殊な用例ということになるかもしれない。あるいは、投機、思惑、冒険という、本来は抽象的な意味で用いるはずの言葉を、具体的な「商品」の意味で用いたもの、すなわち‘abstract for concrete’という修辞法の一例と理解することも可能であろう。

ロビンソン・クルーソーはこのアフリカ航海の後で、5ポンド9オンスの砂金をアフリカから持ち帰ったという記述が続く。この砂金は前に触れた‘adventure’、すなわち、彼が持参していった「玩具や安物の雑貨類」が、彼の思惑どおりにアフリカで「商品」となって、それらとの交換で手に入れたものだと理解すべきであろう。だが、この砂金は金ではあっても、流通を前提に鑄造された貨幣ではない。ヨーロッパがアフリカ大陸まで巻き込む形の貨幣経済はまだできあがっていないということである。ヨーロッパが金銀を貨幣として用いていたのに対して、「アフリカ現地の多くでは、子安金を通貨としていた」ため、アフリカの人々にとって金銀はヨーロッパにおけるほど価値がなかったという（川北：84）。コロンブスが1492年にカリブ海に最初に到着したとき、そこで出会った先住民に対して彼が示した金への執着心は、『コロンブス航海誌』で後世に伝えられることになった光景である。それ以来、ヨーロッパ人の金に対する欲望はよく知られているだろう。

ロビンソン・クルーソーがどのようにしてその重量の砂金を入手したか、その経緯は記述されないので、邦訳のひとつが‘for my adventure’を、「持っていった商品売って五ポンド九オンスの砂金を手にいれた」と訳しているのは、間違っていないかもしれないが、「商品」や「売る」という言葉には、ヨーロッパとアフリカを結ぶ貨幣経済が確立していたかのような暗示が強くなりすぎるであろう。アフリカでまだ金が通貨として位置付けがなかったとすれば、本来の意味で交易と名付けるような行為があったかどうかとも疑わしい。暴力をとまなう、詐欺まがいの交換（バーター）が行われていたと考えた方が実情に近いのかもしれない。ロビンソン・クルーソーの言葉をよりよく実情を伝えようとするならば、「思惑で持参した玩具

や安物の雑貨類と交換して砂金を手に入れた」となるであろう。

邦訳のもう一方の訳はこの部分を「ひと儲けするつもりで五ポンド九オンスの砂金をもって帰った」と訳し、それによれば、‘for my adventure’の部分は、「ひと儲けするつもりで」となる。だが、これでは前後関係から何を意味するのがよくわからない。まず、その砂金をどのようにして入手してきたかについて何も言わないことになる。また、砂金をロンドンに持ち帰ることが、どのような意味で「ひと儲け」につながるのか、これでは事情が納得できないことになろう。「儲け」は、地域間の差異を利用する交易が生み出す。それが原則である。すなわち、ヨーロッパでガラクタにすぎないものが、アフリカに運ぶことで価値を生み、アフリカで価値のない砂金が、ヨーロッパで貴重なものとなるというように、同一のものがヨーロッパとアフリカで異なる価値体系のなかに当てはめられるからである。「利潤とはどこから生まれてくるのか。もちろん差異からである。利潤とは、異なった価値体系の間の差異からしか生まれてこないのである」(岩井)。

かくて、この「儲け」を維持し続けようとしたら、ヨーロッパ人は自分たちヨーロッパと相手であるアフリカのあいだに存在する差異をそのまま維持し続けなければならない。むしろ、その差異を拡大する努力を払えば、それだけ「儲け」はさらに拡大するであろう。換言すれば、ヨーロッパ人が「儲け」を追求すればするほど、その差異がさらに拡大するように作用する、ということである。その差異が「儲け」を意味することが確認されるやいなや、こんどは逆にさまざまな文化的現象を特定し、それらに差異としての経済的現実性が付与されていくことになる。たとえば、皮膚色の違いなどの身体的特徴や、その他の文化的独自性が、かえってヨーロッパとの交易における儲けを生み出す差異として利用されることになるであろう。

続く‘adventure’の用例は、上で述べたような「商品」を積みこんで船出をしたあと、アフリカに行ったという行為そのものをさして‘adventure’と言われている。二種類の邦訳は、どちらもそこに「事業」という訳をあ

てる。ここは、‘adventure’に含まれる「冒険」の意味を生かして訳してもいいだろう。「冒険的な事業」ということである。ロビンソン・クルーソーによれば、この際の「事業」は成功したという。

そしてその直後に、その船出がロビンソン・クルーソーの「すべて」の‘adventures’のなかで唯一の成功した‘adventure’であったと言われる。ということは、物語全体が回想という形式を採用していることから、これ以降の彼の生涯におけるすべての‘adventure’のなかで、このときだけが唯一の成功した‘adventure’であったということである。邦訳では、「すべての冒険のなかで唯一の成功した……」としている。同じ‘adventure’という単語が、一行前後ただけで、「事業」と「冒険」という異なる訳語が当てられる。この二つの用例から判断すると、題名にある‘adventure’の意味は「冒険」であると同時に「事業」という意味とも受け取れることを示唆する。

このあとロビンソン・クルーソーはサリー（現在のモロッコ）を根城とするトルコ海賊船に捕えられ、ある一定の期間を奴隷の身分でその土地で過ごす。彼は続いて、その奴隷としての生活から抜け出し、今度は新大陸（アメリカ）に渡ってブラジルに到達する。トルコ海賊に捕えられたあとブラジルに到達するまでのことは、すべてまとめて知り合いの船長未亡人に手紙で書き送るべき‘adventures’として言及される。邦訳ではその‘adventures’は、「私の身にふりかかった事件」「思いがけない経験」とされており、‘adventure’の意味内容としてはここではそのとおりである。英語における‘adventure’の本来の意味であると言っていい。だが、訳文だけを読んだ場合だと、それらの「私の身にふりかかった事件」や「思いがけない経験」にあたる英語の単語が‘adventures」という語であることは、どうても想像もできないであろう。‘adventure’が、「冒険」という訳ではその意味内容を十分に伝えられない場合の一例である。

ロビンソン・クルーソーはやがて、ブラジルにおいて自分の土地を取得し、農園経営に手を染めることになる。その農園で必要な労働力として奴

隼を手に入れることを目的にブラジルから船出し、再びアフリカに向かい、その途上で嵐に遭遇する。難破したその船は例の島に漂着することになる。ここからが本論との関係で注目すべきことである。すなわち、ロビンソン・クルーソーが遭難して例の島での生活が始まったあとでは、‘adventure’ という語の用例が忽然と消え去ることである。

ただし、皆無ということではなく、その島を離れるまでに、わずかに 2 例が見える。だがそれらの 2 例は、かえって私の指摘を補強するだけである。すなわち、その 2 例とも、彼が島の外の事象に言及するために ‘adventure’ という語を用いる場合だからである。2 例のうち最初の用例では、島にたどり着く前に自分にふりかかった出来事を回想して ‘African adventure’ として言及する。先に「事件」とか「経験」と言われていた内容のことであり、邦訳では今度は、「アフリカで苦労していたころ」「アフリカの冒険」と訳されている。

もうひとつの用例が出現するのは、島の生活を続けてずっと時間が経過してからのことである。ロビンソン・クルーソーの島での生活は、終わりに近付いている（物語全体が回想であるから、そのことはすでに語り手はよく承知している）。そして彼は、まもなく 11 月か 12 月になって準備が整ったあかつきには、フライデーとともにその島から脱出を敢行しようと計画をたてている。その計画の内容を指して彼は ‘adventure’ と言っているのである。邦訳では単に「冒険」である。これら二つはどちらの用例も、島での生活を ‘adventure’ と言っているわけではないことに注目すべきである。

ロビンソン・クルーソーがその島から脱出した後では、‘adventure’ という語の用例は 4 例しかない。それらのどれを取り上げても、島で生活した経験を指しているわけではない。ひとつめは、リスボンを発ったあとの「長い困難な旅行中におこった若干の冒険」というもので、この用例もある意味で興味深い。すなわち、「冒険」が「おこった ‘happened’」と言われているのが、日本語の「冒険」の語感から言って不思議である。われわれ、

つまり近代の読者の感覚から言って、「冒険」は挑戦するとか、敢行するとかするものであって、その本人が危険を覚悟で意図的に行なうもの、と考えがちである。ところがここでは「冒険」が「おこった」というのだ。これはむしろ、最初に‘adventure’の第3の意味としてあげた「新奇な出来事」の意味で用いられた例というべきであろう。

残りの三つの例は、*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*の最後になって、そこにいたるまでの回想全体をしめくくる文脈で用いられる。題名で用いられる‘adventure’と同じ用法と考えていいだろう。まず彼がそれまでの語りを振り返って、‘the first part of a life of fortune and adventure’を述べてきたという箇所である。邦訳では「禍福の人生模様の、第一部」となっている。この訳を文字通り受けとめれば、「福」は‘fortune’のことだろうから、‘adventure’は「禍」にあたることになる。「禍」とは、「わざわい、災難」のことだが、‘adventure’にはわざわいや災難の意味はないと思われる。

最後の二つの用例は、この物語にはやがて続きが、つまり第二部があるだろうことを暗示する文脈で出現する。まず、‘farther adventures’と言われており、邦訳では「またもや冒険に……」となっている。第四の、つまり物語の最後の用例が出るのは第一部の結末の文章であり、‘some new adventures of my own’と言っていることから、第二部が書かれるであろうことをはっきりと予告している。

では、以上をまとめると、ロビンソン・クルーソーの‘adventure’とは、いったい何なのか、それは一括して言うとしたら、何だと言ったらいいのであろうか。私の考えでは、ロビンソン・クルーソーの‘adventure’とは、ヨーロッパがコロンブスの新大陸発見以後16世紀からグローバルな規模で推進していた近代化の事業の一環としてとらえてこそ、よりよく理解できるのである。ロビンソン・クルーソーが表象しているのは、グローバルな規模で進出を始めていた、まさにヨーロッパである。

④ 「冒険」なき空間

以上のとおり、本文中に出現するその語を検討することによって、ロビンソン・クルーソーが「絶海の孤島」で「冒険」をするとばかり思い込んでいた者にとって、意外な事実が明らかになった。すなわち、彼がその島で生活を送るうち、筆者であり登場人物でもあるロビンソン・クルーソー自身が、その島における自分の生活であれ事象であれ、それらを‘adventure’という語を用いて言及することは一切ない、という事実である。

本論の最初にその‘adventure’という語の歴史をたどり、その語はさまざまな意味で用いられてきたこと、日本語にはそれが「冒険」と訳されて入ってきたことを確認した。だが、その‘adventure’がそなえる意味のうち、どの意味においても島の生活は‘adventure’とは名付けられていない。ロビンソン・クルーソーの島における生活とは、「冒険」なき空間なのであった。

これは不思議なことだと言わなければならないだろう。というのも、何回も繰り返すことになるが、ロビンソン・クルーソーの島における生活こそ、*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner* の核心部であり、ロビンソン・クルーソーの「冒険」そのものであると、われわれは前から紹介されもしているし、またそのとおりだと（少なくとも私は）受けとめてきたから。

たとえば先にも紹介したとおり、「さまざまな困難に立ちむかい、知恵を働かせて生きた28年間のひとりきりの大冒険」としてこの物語内容を一般の人々に紹介する言葉があった。その訳者が巻末に付け加えた「解説」においても、「絶海の孤島での冒険」という言い方が用いられている。それらの紹介文では、彼の島での生活が「冒険」だとして記述されていることは明らかである。

しかし、上で確認したとおり、ロビンソン・クルーソー自身はその島にとどまっているあいだについて言及するときに、それが‘adventure’であるとは一切言っていない。その生活は彼にとって他に人間の姿の見えない

島に漂着することによって自分が強いられた‘solitary life’（孤立した生活）（ペンギン版57）ではあっても、彼自身にとって‘adventure’と呼べるものではない、と結論づけなければならない。彼の島での経験は、島にたどり着くまで、及び島を脱出してからの島外における彼の経験と比べれば、明らかに異質であり、少なくとも「冒険」ではないのである。

では、当のロビンソン・クルーソー本人が冒険と言ってもいいものを、われわれ読者が「冒険」と名付ける過程が起きたことによって、*The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner* というテキストに何が起きているか、と問いかけてみなければならぬだろう。

すなわち、ロビンソン・クルーソーの物語には、島にたどり着くまでの経緯があり、島を脱出してからの経緯があり、その間には島における28年間の生活もある。これらの事象を総合して、その書物の題名にあるとおり‘adventure’という言葉で表わすとしたら、ロビンソン・クルーソーの‘adventure’を全体としてどのように認識すればいいのか、読者は挑戦を強いられるだろう。挑戦どころか、読者にすればそのようにしてロビンソン・クルーソーの「冒険」を理解しようとするのが普通である。

ところが、われわれはロビンソン・クルーソーの‘adventure’が島内のことだと、その島内の空間だけに押し込めてしまった。それがすなわち、「近代主義的読解」の実態である。われわれ読者は、ロビンソン・クルーソーの‘adventure’すなわち「冒険」を、「絶海の孤島」の中だけのこととして読めばいいと紹介され、教えられたのである。

かくて読者は、島にたどり着くまで、及び島を脱出してからの事象こそが、テキストの指示する意味の‘adventure’であるにもかかわらず、それら本来の‘adventure’の内容について考慮することは不可能になるだろう。なぜなら、その島とは‘adventure’なき空間なのであるから、それを‘adventure’と言い張るとしたら、読者は実際のところ何を言ってもいいのである。彼が島にいるあいだを語るテキストには‘adventure’という語が現れないかぎり、読者が島内のいかなる事柄に‘adventure’と名付けても、

テキストはいっさい抵抗しないからである。ロビンソン・クルーソーの孤島における‘adventure’について語ろうとするかぎり、読者は何を言ってもいいが、そのかわり島内の事柄について‘adventure’として何を言っても間違いである。

これと関連して、ロビンソン・クルーソーの冒険なき島を日本の読者が「絶海の孤島」と思い込んだことについては、どう理解すればいいだろうか。それは、彼の‘adventure’が島内のことに限られるとして読んだ近代的読解に対応する、わが国の読者の反応にあたるものといっている（注4）。「絶海の孤島」のイメージは、ロビンソン・クルーソーの物語全体を「孤島の物語」へと変容させ、島にたどり着く前と、島を脱出したあとの物語を読者の視野の外に置くために、大きく貢献したと思われるからである。

かくて、ロビンソン・クルーソーの物語を‘adventure’またはその訳語としての「冒険」物語として読むかぎり、われわれはその島における物語についてテキストに即して語ることはできないことが明らかになったと思う。では、その島での生活——島における「冒険」として誤解されているもの——とは実際のところ何なのか、と問いかけてみなければならない。

前にも触れたように、作者デフォーはその当時流通したさまざまな他のテキストを読んで、それらのテキストを下敷きにしてこの物語を書いた（増田：4,ワット：90）。それはもちろん疑いを容れる余地はないだろう（ロビンソン・クルーソー物語の方も、その他のテキストに対して、それらの下敷きになるという関係が当然のことながら存在するが）。

これは、換言すれば、次のようにディケンズ小説について言われたことが、デフォーについても当てはまるだろうと考えることである。すなわち、「ヴィクトリア時代の実業家をディケンズがどのように表象したかについての国民的コンテキストと国際的コンテキストを見失うか無視して、もっぱらディケンズの小説内部に内的統一をたもってあらわれる登場人物としての役割だけに集中することは、ディケンズの小説と、その歴史的世界との本質的なつながりをみないことになる」（サイード：46-47）と。ロビン

ソン・クルーソー物語について言えば、その「冒険家」をデフォーがどのように表象したかについて、デフォーの小説と「その歴史的世界との本質的なつながり」を考えるとということである。それは次回の課題としよう。

注

1. 原著の表題は *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner.* であるが、そのタイトルページには物語内容についての説明がその表題に続けて次のように記載されている。‘Who lived Eight and Twenty Years, all alone in an un-inhabited Island on the Coast of AMERICA, near the Mouth of the Great River OROONOQUE; Having been cast on Shore by Shipwreck, wherein all the Men perished but himself. WITH An Account how he was at last as strangely deliver'd by PYRATES. Written by Himself.’

どこまでが物語の表題と言っていいかも問題になるかもしれないが、*The New Cambridge Bibliography of English Literature* では、次のとおりの項目となっている。‘The life and strange surprising adventures of Robinson Crusoe, of York, mariner, written by himself.’

2. 森田思軒は明治の新聞記者、翻訳家、批評家（1861～97）。
3. アンソニー・ギデンズもやはり、「国民国家」が近代を特徴づけるもののひとつであることを次のように述べている。「制度群の面から見れば、《国民国家》と《体系的な資本主義生産》という二つの別個の複合組織体が、モダニティの発達にとってとりわけ重要であった」（ギデンズ：215）。
4. ロビンソン・クルーソー物語について「絶海の孤島」として言及した最初の例は、現在のところ私にわかっている限りでは、昭和2年すなわち1927年に出た、佐治秀壽著『英國小説史』の次のような記述である（「絶海の無人島」だが）。「併しロビンソン、クルウソウには景色の美的な描寫とか、絶海の無人島に孤獨の境にある男に印象を與ふる様な空や海の壯嚴なる又震駭戦慄すべき光景の描寫など更らない」（佐治：10）。

引用文献

- 岩井克人「近代」再考—限界と可能性①～⑥『日本経済新聞』2001年1月1日～7日朝刊連載
- 岡田英弘「民族幻想」の起源』『大航海』No.15,1997 APRIL（新書館）所収24-32.
- 川北稔『改訂版ヨーロッパと近代世界』放送大学教育振興会,2001年
- ギデンズ,アンソニー（松尾・小幡訳）『近代とはいかなる時代か』而立書房,1993年

- 『コロンブス航海記』林屋永吉訳,岩波文庫,1977年
サイード,E.W.『文化と帝国主義 1』みすず書房,1998年
佐治秀壽『英國小説史』研究社,1927年
ダニエル＝デフォー/作 中野好夫/訳『ロビンソン漂流記』（講談社,1995年）のカヴァーに記された内容紹介文
デフォー作 平井正穂訳『ロビンソン・クルーソー（上）』岩波書店,1967年
デフォー著 佐山栄太郎訳『ロビンソン・クルーソー——生涯と冒険——』旺文社,1967年
富山太佳夫「文学史が崩壊する」『文学』第5巻・第1号1994年冬（岩波書店）所収45-53.
中野好夫「ロビンソン漂流記（解説）」ダニエル＝デフォー/作 中野好夫/訳『ロビンソン漂流記』（講談社,1995年）の巻末334-339
平井正穂「はしがき——ロビンソン・クルーソーという人間——」『ロビンソン・クルーソー』（上）岩波書店,1967年
増田義郎『略奪の海カリブ——もうひとつのラテン・アメリカ史——』岩波書店,1989年
ワット,I.（橋本他訳）『イギリス小説の勃興』鳳書房,1998年。原著は1957年に発行された、Ian Watt, *The Rise of the Novel* である。
Defoe, Daniel, *Robinson Crusoe*, ed. with an introduction by Angus Ross, Penguin Books, 1965, original title, *The Life and Strange Surprising Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner*. Published in 1719.

辞典類

- 齋藤勇監修,西川正身・平井正穂編集『英米文学辞典』研究社,1985年
小稲義男他編集『研究社新英和大辞典』第5版,研究社,1980年
『日本国語大辞典』第2版,小学館,2001年
Oxford English Dictionary, Oxford University Press,
The New Cambridge Bibliography of English Literature, Cambridge University Press, 1971.